

## 20・21世紀の渡来人と日本

—アジアの心が世界平和を繋ぐ—

蕭 紅燕



近年、南中国海の海域に分布する島々の領有権はじめ、釣魚島 (Diaoyu Island) をめぐる紛争がマスコミを賑わして久しい。これらの問題について、文化人類学専攻者として、授業時に質問を受けることもしばしば。きちんとお答えしなければならぬと感じ、いやでも勉強させていただいた。

## 日本との縁—20・21世紀の渡来人

我が家の母方親族は何世代にもわたって日本との縁がある。清末(おそらく大正期)、曾外祖父(1874~1929)が孫中山(孫文)に追隨して早稲田に留学。ちよどこかの有名な小説『留東外史』の著者、不肖生とほぼ同時代。帰国後、江蘇省に帰った彼は革命党の新聞をつくるために家財を注ぎ込み、のちに北平政府財政部に職を得た。2代目は外祖母卜珣華(1909~1997)。1935~1945年、封建的な大家族での閉塞的な結婚生活の束縛から抜け出すために、官費留学に合格して歯科医を目指した。日本女子歯科医学専門学校を卒業後、母校の教員となり、さらに歯科医として開業。夫も後を追うように2人の娘を連れて東京に来て、内科医の勉

強をした。母は3代目にあたる。外祖母が子連れ官費留学だったので、大姨が現在の東京女子医科大学、母は目黒区の洗足学園で学んだ。1950年代前半のロシア留学を経て長年、大学でロシア語を教えていた母は中日国交回復後、教師の不足で急遽日本語で教鞭をとるようになった。そして凶らずも日本留学、滞在4代目(1986年)となったわたしの日本との出会いは、1976年の唐山大地震後。北京で開講された日本語ラジオ講座を、暇つぶしに毎日聴講するうちに、1977年に大学入試制度が文化大革命後の約十年後に復活。翌年、日本語で受けた北京大学への入学がきっかけとなった。1990年代以後、妹一家も東京に暮らすようになるが、姪が5代目となる。

前置きがやや饒舌になった。わたしは数年前から「不入村子、焉知村民」(村に入らずんば、村人を知らず)の想いで高知市に最も近い山村に移住した。大学の前任が限界集落という言葉の生みの親である大野晃先生。疲弊する日本の村落社会、土地制度にがんじがらめに束縛され、新規就農もままならぬ日本の農業。都市部はもとより、ムラでさえ、自力救済と

いかつての合言葉がもう死語に近い。土佐はまさに現代日本の縮図。移住したムラには、米国人や波蘭人の隣人がいて、琉球出身の家人が参加する20軒足らずの寄合の席を、日本国籍でない常連が2戸も占めている。わたしはそこで「土佐から世界が見える」と考え、自分なりの地域社会学を試みてきた。民俗学者宮本常一の記録した忘れられた日本人(学生曰く「知らなかった」日本人だよ)を掘り起こし、病める現代社会の処方箋を探るのが課題である。

このようにご縁あって、アジア人として、地球人として、大学で「地域社会学」というポストで実践する在日中国人として、ムラの村民として、というのがわたしの立場。

## 甲午戦争の故地を訪ねて

さて、今夏の帰省時に再度山東半島を訪ね、秦の始皇帝東巡(紀元前219年)の地、文登や道教全真派の聖地、崑崙山を訪れるうちに最東端の威海まで足を運んだ時、かの有名な劉公島が眼前にあった。ここは近代史上、忘れてはならぬ記憶に新しいあの威海衛。つまり、甲午戦争(1894年7月25日の豊島海戦~1895年4月17日「馬関条約」の調印)の主舞台となった場所だ。すっかり観光地化した劉公島には「甲午戦争博物館」があり、わたしはそこで久々に映画『甲午戦争』を鑑賞し、感無量であった。

中国近代史の幕開けとなったのは1840

年。英国が引き起こした鴉片戦争<sup>あへん</sup>によって、中国は半封建、半植民地となつてしまい、さらに「脱亜入欧」をはかる日本との関係が逆転したのは甲午戦争。戦争に敗れた清国は侮辱的な不平等条約「馬関条約」の調印を強いられ、台湾、澎湖及びその附属の島の日本への割譲はじめ、内陸部港湾都市の開放、莫大な賠償金、日本製品の免税など理不尽な要求を強制されてしまう。とりわけ植民地台湾の獲得により、日本資本主義の原始的蓄積が完成され、それまでの東アジアの英露対峙の局面を変え、1902年の英日同盟や1904年の日露戦争の契機をつくった。一方、それ

まで天下の大清帝国は西欧列強にとつて、まさに「鯨呑蚕食」(弱肉強食)の対象となつた。中国人にとつての近代史とは、西欧列強による侵略と蹂躪に虐げられた多難な時代であり、近代中日史とは、これはまた侮辱的な不平等条約はじめ、侵略と蹂躪、資源強奪のほかはない。中華民族や中国人という用語と民族意識、民族心理素質もこの時代背景のもとで形成されたといわれている。先輩格の帝国主義、植民地主義者の西欧列強に遅れをとらぬよう、または自国利益を最優先するために、後輩として中国への侵略にいち早く乗り出した日本は欧米諸国よりも遙かに残酷極まる仕打ちを近隣国に行い、数千年にわたつて中国から多大な恩恵を浴び続けてきた日本は、以德報怨(徳を以つて怨に報いる)どころか、落井下石(井戸に落ちた人を助け出さず、かえつて

石を投げる)よりもひどい行為をおこなつた。釣魚島の領土問題云々とは、まさに甲午戦争以後、植民地となつた台湾との関連無しでは考えられない。

つまり、前近代のアジア、アフリカはじめ、世界中のどこでも西欧列強の侵略と資源強奪が蔓延<sup>はびこ</sup>り、いわゆる資本主義の原始的蓄積のほとんどが経済的に立ち遅れた国や地域、民族の血と涙の上に成り立つたものではなからうか? 日本の場合、明治期の有名人物の評伝、主要財閥の発家史(財を起す経緯)は侵略戦争や植民地支配とは切つても切れぬ関係にある。さらに、戦後日本の復興や高度成長を支えた基盤も戦争景気と米国の支持ではないただろうか? 「大樹底下好乘涼」(寄らば大樹の蔭)の気持ちはわからないでもない。しかし、明治以来、日本がここまでして手に入れたのは何か? 沖繩を犠牲にして米軍基地をつくつた日本はいま米国植民地そのものではないか? 「為虎作倂」(虎に食われて死んだ人が鬼となつて、人殺しの手助けをする)的な行為をいつまで続け、遠交近攻的な政策をとるのか?

## アジアの心が世界平和を繋ぐ

立ち、わたしの住む山村にまで右翼の宣伝カーが平気で軍歌を鳴らして巡回したりしている。これで果たして戦争への反省があるのだろうか? ドイツ人のように過去に犯した罪を真剣に受け止め、償わなければどうして近隣国の信頼を得、新たな一步を踏み出せるのか? そして、第二次世界大戦の反省をしたとしても、それ以前の不義なる戦争と侵略を省みず、自分に不利な過去はいとも簡単に帳消しにするのは、植民地主義者たちの共通項のようだ。

近代化の弊害を憂える明治期の岡倉天心著『茶の本』『日本の目覚め』『東洋の理想』をこの頃読み直しており、共鳴を覚えることが多々ある。ぜひご一読をお薦めしたい。

中国は歴史上、どんなに強い時代でも他国への侵略はもつてのほか、むしろ世界諸国との貿易に力を注いできた。明代の「鄭和七下西洋」(鄭和、西洋を下る)はまさに貿易の旅であり、中華文明と平和理念を伝播する旅であった。世界の真なる平和をどうすれば実現できるか? 中国ならではの世界貢献、日本ならではの世界貢献があるはず。一言でいうなら、欲に奔らず、知足の想いで持続可能な発展を念頭に人口も適正規模に押さえておき、野生動物や植物との共生をはかり、多様な価値観と文化の共生があつて初めて、人類の平和が訪れるだろう。

(しょうこうせん)高知大学人文学部地域社会学研究室、社会学博士